

## 巻頭言

# 私共の郷土史研究

佐伯史談会副会長

羽 柴

弘

ひとくちに郷土史というが、それはけっして歴史的なことばかりでなく、その分野はかなり広く、どうかすると、「へえー、そんなことまで」と驚くほど広範囲に互っている。いわば、郷土を正しく理解するために、歴史をさかのぼって昔の姿を追い求め、今の在り方をこれでよいかと考え、将来よりよい郷土の発展を目指そうというものである。いうなれば今、はやり言葉となっている「ふるさとづくり」の基本的な勉強・努力を目指すものである。以下思いつくままに、その原点ともいえるいくつかについて、ざぱり述べて見たい。

第一に、郷土史の研究や調査は、直接現物に当ることが必要、そしてその研究は、信頼するに足る文献や資料を用いたい。例を庚申信仰にとれば、まず村里を巡ってできるだけ広く実物の庚申塔を観る。同時によい手引書

によって学び、出来れば今も点々と残っている実際の庚申待の行事に参加して、長い伝統に膚でふれてみて理解を深めることである。

第二に、その土地の立地事情をよく知ること。とくに地学や地誌的な探訪が必要で、そのためには歩いて見ることである。道路の切取りに凝灰岩の露出があれば、三万年昔の阿蘇山の大爆発がしのばれ、河原石の層が高い所に発見されれば、河川による土地の侵食と運搬と沖積のことがわかり、その村の地質や地味が想像される。

次に、皆さんに私は、庶民生活史の追求をおすすめしたい。お殿様中心の旧来の郷土史から早く脱却して、封建治政下、百姓達はどんな暮らしをしていたか、どんなことを強いられていたか、それである。それは佐伯の藩政を無視せよとか、藩侯の人物なり治績を軽視するとか、

そんなことではない。市内養賢寺裏山にある、豪勢な毛利家の墓塔は、県下随一と誇ってよいが、例えば山陰の苔むした孝子・節婦の墓も、劣らず大事に思いたい。

さらにその庶民生活の記録ともいうべき、民俗資料の収集や生活技術の伝習である。竹馬をこしらえたり、わらぞうりを作ったり、炭を焼いたり、家で味噌や醤油をつくったりで、今の老人達が死んだら、それらの生活文化は一切消滅してしまう。

その外、地名やことばも先人の残してくれた遺産、この収集には時日を要する。たえずメモをとり、分類・整理をつづければ、わがふるさとの独得のものが必ず集まる。因尾の柳井氏は「地名は歴史である」とよくいわれる。全く同感である。私は方言の収集もつづけているが、その大半は古語から出ているのに驚く。ふるさとに根強く生き残っている昔の言葉に注意したい。

思い出したが、今号表紙の写真は、市内上岡の十三重の層塔で、土地の人達は昔から「クジンの塔」と呼び、その言葉の響きからであろうか「九重の塔」と漢字を宛てていたこともある。勿論これは誤りであるが、なぜ「クジン」と呼ばれたのか、私は久しく疑問としていた

が、このごろやっとわかった。

真実の追求には「疑わしきは疑う」に限る。クジンは九<sup>くじん</sup>仞で、辞典によれば隣邦中国古代の、高さ・深さの単位、一仞は七尺、九仞で六丈三尺（約一九尺）、もちろん測定してのそれではなく、大変な高さということである。深さを誇張して「千仞の谷」といい、「九仞の功を一簣に欠ぐ」という、その九仞の塔であった。

この石造層塔は鎌倉末期のもので、佐伯氏の造立と推定され、相輪部を除いて実際の高さは七・五八尺（約二丈五尺）建造物として県の文化財に指定されている。当時人の手によって建てられたものに、このような高さの建造物はなかったはず。さてこそ「九仞の塔」の呼び名が納得できたというのである。

すぐれた郷土先人の遺跡、遺業の跡とか、産業開発の事績とか、さらにまた文学や芸能に秀でた人々のことなど、忘れ去られてはたまらない。出来るだけ調査して記録に残し、誰にでもわかる平易な文章でまとめ、この「佐伯史談」に登載し、次の世代に残そうではないか。

そのためには、喜んでこの紙面を皆さんに提供したい。会員皆さんの寄稿をおすすめする次第である。（おわり）